

傾斜地の植生改善

追播は低コストで作業性も良いことから植生改善に広く利用されています。作溝型の追播機が主流となっていますが、傾斜地では課題もあります。



タックス TACSしべちゃ（標茶町研修牧場）で課題となったのが急傾斜地での作溝型播種機による追播でした。2番草収穫後に追播された草は、翌年の1番草収穫期を迎える頃はまだ十分に根を張った状態にはありません。こうした草地が傾斜地の場合、特にルートマットの



厚い箇所では既存草が張芝^{はりしば}のような状態となっているため、大型の作業機がスリップしやすく、モアコンがスリップすると土砂が混入し、自走式ハーベスターに至っては並走するダンプに接触しやすいといったリスクが生じます。

しからはせんこう^{せんこう}型の播種機はどうか？

現在、国内で利用されているタイプはグランドホックです。しかしこれは土壤の物理性改善が主目的で、播種精度には難があります。そこでグレイトプレインズが新型播種機（ノ

ーティルシーダー・下写真）を開発、それを㈱IDECが輸入し、今回同社の協力を得て、TACSしべちゃの傾斜地にて表層攪拌と比較してみました。



今回の試験は簡易更新により行われました。完全更新とは違い土壤の物理性改善の効果が低いため、事前にサブソイラーを施工し、心土^{しんど}破碎を実施しました。

サブソイラー施工のポイントは、まず春先や1番草後を避けることです。理由は溝の淵から乾燥しやすく、隆起して凸凹になってトラクターで踏んでも元通りにはならないからです。急激には乾燥しづらい秋作業が基本となります。



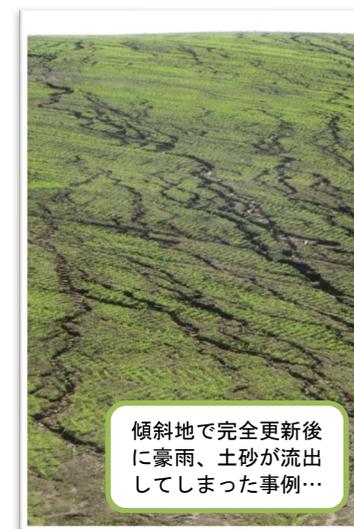
そして傾斜地においてもひとつ重要なポイントとなるのは、作業動線に対し平行に施工しないことです。これをすると逆に雨道を作ってしまう。土砂を流出させやすくなります。そして越冬後はトラクターのタイヤで溝をつぶしやすく、陥没させる恐れもあります。しかし作業動線に対し垂直にも施工しません。これを行ってしまうと刈取りや収穫作業

時に圃場から凸凹の振動を受けやすくなり、作業効率を低下させます。圃場の対角線上に行くと、その後の作業にも影響が少なく、施工効果も高くなります。昨年、厳しい台風の過ぎ去った後、心配して圃場を確認しましたが、サブソイラーによる排水効果があり、傾斜地でありながらも穿孔区・表層攪拌区も土砂の流亡は防ぐことができました。

下の写真は播種後およそ2か月後（10月中旬）です。表層攪拌区では土砂の流亡もなく順調に生育しています。穿



孔播種機による簡易更新区も栽植密度は低いものの生育は良好です。今後、春先の生育状況や1番草収穫後の草地の状況を確認しながら、施工効果を評価していく予定です。



情報提供：TACSしべちゃ・龍前直紀場長

